川越街道ウオーク【Ⅵ】川越市内①コース順番

東武東上線　川越駅　（集合　改札口　午前10時）
～三重家住宅門
～川越八幡宮（川越八幡宮御神木「縁結びのイチョウの由来」、民部稲荷神社〈相撲神社〉）
～鉤（鍵）の手
～永島家住宅旧武家屋敷～瘡守稲荷神社
～七曲がり
～鉤の手
～川越城西大手門跡・川越街道の終点（川越城大手門跡」の石柱と太田道灌の像）
～大蓮寺～高澤不動尊
～六塚稲荷神社
～WC～**濯紫公園・WC**
～見立寺（板碑（青石塔婆）2基、徳本上人名号碑、松平（松井）周防守家の阿弥陀如来坐像並藩主位牌、赤穂浪士八頭右衛門七の妹の墓（六地蔵の隣）
～菓子屋横丁
～養寿院（伝・悲運の武将河越太郎重頼の墓・文応の銅鐘・円空仏一体・岩田彦助儒葬墓・「川越城の七不思議、七、城中蹄（ひづめ）の音」屏風画・源義経と重頼の娘である郷御前の位牌の写し
～蔵造りの街並み
～蔵造り資料館
～川越まつり会館
～大沢家住宅～本宗稲荷神社・稲荷の井戸
～時の鐘～薬師神社
～長喜院（苦行釈迦像・大梅乾闥大鬼神王）
～雪塚稲荷神社
～榮林寺（移築された川越城蓮池門）
～蓮馨寺（呑龍上人呑龍堂・林崎甚助重信ノ鎮魂之碑）・WC
～川越熊野神社（加祐稲荷神社・川越銭洗弁天厳島神社と宝池・秋葉神社・大鷲神社）
～火除稲荷
～出世稲荷神社～大正浪漫夢通り
～西武新宿線　本川越駅

川越街道ウオーク【Ⅵ】川越市内①

歩行距離　約9．5km
集合場所　東武東上線　川越駅　改札口
集合時間　午前　10時
コース　川越駅～三重家住宅門～川越八幡宮～鉤の手～七曲がり・永島家旧武家屋敷～鉤の手～川越城西大手門跡（川越街道終点）～大蓮寺～六塚稲荷神社～濯紫公園～見立寺～菓子屋横丁～養寿院～蔵造り資料館～川越まつり会館～大沢家住宅～本宗稲荷神社と稲荷の井戸～時の鐘～薬師神社～雪塚稲荷神社～榮林寺～蓮馨寺～川越熊野神社～火除稲荷～出世稲荷神社～西武新宿線本川越駅

川越駅東口を出て、右側の歩道橋を下り、ローソンがある信号交差点を左折。信号がある三番町通りを横切り、八幡通りを8・90m進んだ左側奥に登録有形文化財の「三重家住宅門」がある。

三重家住宅門（登録有形文化財・建造物）

昭和前、1931年頃の建築。
木造、銅板葺、間口1．7m、左右袖塀及び潜戸付。登録年月日2014年12月19日
敷地東辺南寄りに位置し、八幡通りに向けて開く。一間一戸の腕木門で左右に袖塀を付属す。わずかに起りをつけた切妻屋根を軽やかにかける。袖塀は竪板壁の上部を挽き板の目透し欄間とし、銅板葺の屋根をかける。主屋前の庭園とともに閑寂な佇まいを醸す。

そのまま八幡通りを120m程進んだ右に**「川越八幡宮」**の入口がある。 川越八幡宮の境内には、民部稲荷神社（相撲稲荷）、ぐち聞きさま、目の神様がある。

川越八幡宮

御祭神は、誉田別命（応神天皇）。
当社のホームページによる由緒は、
川越八幡宮は、第68代後一条天皇の時代の長元3年（1030）に甲斐守源頼信（中島注：河内源氏の祖、墓は羽曳野市壺井の通法寺跡に頼義・頼家と共にある）によって創祀されたと伝えられています。
長元元年（1028）、下総国（千葉県）の城主前上総介平忠常（中島注：村岡五郎平良文の孫、平将門は父方の従父で母方の祖父）は朝廷に謀反を企て、安房、上総、下総の3ヶ国を従わせ、大軍を起こして武蔵国に攻め入りました。この乱は長元の乱と言われ、3年に渡り鎮圧できませんでした。有力武士だった冷泉院代甲斐守源頼信が長元3年に平忠常追討の綸旨を賜りました。
源頼信は当地で必勝祈願を行い、敵陣に切り込んだところ、忠常の軍勢はたちまちに乱れました。そして、三日三夜の間、追討してついに乱を平定しました。頼信は神様の御神威に深く感謝して、すぐに当地に八幡神社を創祀しました。これが当社のそうけんです。
当時このあたりは、豪族河越氏の所領で鎌倉時代、神社後方に河越氏の館がありました。応永32年（1425）には、関東管領足利持氏（中島注：足利持氏は第4代鎌倉公方で、関東管領は山内上杉憲実）河越兵庫介の館跡地の半分を当神社に日供料として寄進したといわれています。長禄元年（1457）、川越城が完成しました。築城の名手だった太田道灌は当神社を篤く崇敬し、分霊を川越城内の守護神として奉斎しました。
爾来、川越の歴代城主、城代の崇敬が深く、特に天正18年（1590）以来の城主・酒井氏一族の崇敬はす

こぶる篤く、社殿の造営、神田、神宝の寄進が相次ぎました。酒井氏は国替後も崇敬を加え、しばしば改築費、修繕費等を奉納しました。文化9年7月1日(1812)、姫路城主・酒井雅楽頭源朝臣忠衛は御神号「河越八幡宮」(文字は向鳩形)の額と掛物一幅を奉納しました。寛永2年(1625)には、徳川家光公が日光社参の折、酒井備後守忠利が道中安泰の祈願をし、その功により葵紋付祭器具の寄進がありました。

川越八幡宮境内には、根本部分でくっついている二本のイチョウの大木がある。

川越八幡宮御神木「縁結びのイチョウの由来」

平成・明仁天皇がお生まれになった御年(昭和十二年十二月二十三日・1937)川越八幡宮の氏子によって、男イチョウと女イチョウ二本を植樹したが、いつしかその二本の木は寄り添い合い一本に結ばれたことに由来する。

固く結ばれた二本の御神木に触れ、手を合わせると良縁に巡り逢うといわれている。

その左に祀られている「民部稲荷神社」は、通称「足腰健康の神様　相撲神社」として、古くからあがめられている。(中島注:「相撲神社」は、奈良県桜井市穴師の大兵主神社の神域のカタケヤシ(現・穴師坐兵主神社)にあり、大兵主神社(穴師坐兵主神社)の摂社。垂仁天皇の頃、當麻蹴速と野見宿祢がここで相撲をとったのが相撲のはじまり。2007年4月3日参詣)

民部稲荷神社(相撲神社)の由来

御祭神は、倉稲魂命(うがのみたまのみこと)

「まんが日本昔ばなし」による老狐の伝説。

昔、多摩郡八王子在の寺の小僧が、毎晩西の方、七・八町先にある民部様のお屋敷に遊びに出かけた。その方角はどこまでも山つづきでお屋敷などないのに変だと思って住職は、その民部様を一度この寺にお連れ申せと小僧に命じた。やがて民部は駕篭に乗り十二、三人の供を連れてやってきた。よもやまの話の末、民部がしきりに相撲自慢をするので住職もそれなら寺の坊主たちと民部の若党たちと相撲をとらせようということになった。さて、やってみると民部側はみな小兵なのに滅法強く、寺の坊主たちは惨々に打ち負かされたが翌くる日みると相撲をとった跡に赤い毛や白い毛が沢山散らばっていた。

こうして正体を見破られた民部狐はもはや人界の交わりも適わぬため東北の方十里ばかりの入間郡川越の梵心山に移ることになった。そして民部狐は訪ねてきた和尚に厚く礼を述べ打ち身の手当てを教えたという。

この梵心山に民部稲荷が古くからあったが荒廃し、後に八幡神社の境内に移されて相撲の絵馬額が今も納められている。打身、挫きの時相撲絵馬を納めれば霊験があらたかだとされている。

八幡宮の参道を出て東に進むと県道39号線川越街道に突き当たるので左折する。450〜60mの通町信号交差点を過ぎて100m程のところに**「鉤(鍵)の手」**がある。鉤の手とは、城下町の戦略道路で、屈曲させることにより、敵の侵攻を遅らせたり、遠望が出来ないようにしたもの。

鉤の手から川越街道を北上、270mで松江町交差点。右角の「ポケットパーク」には、トイレ・東屋休憩所がある。松江町交差点を渡り右折、県道15号線を東へ160m程の福田屋書店と太田屋茶店の間の露地を入る。この辺り(三久保町)は武家屋敷町で、**「七曲がり」**と言われる「鉤の手」、「丁字路」やはたまた「袋小路」が多い地区である。

七曲がり（三久保町永島家住宅前の解説板より）

川越城下の武家地は、城の近くに上級武士、離れるに従って中・下級武士、街道筋には足軽屋敷が配置されていた。こうした構成は江戸時代を通じて変化はないが、家臣団の規模により武家地の領域にも変動があった。

松平大和守の入封に伴い、武家地は大きく拡大する。秋元家時代（1704～1767）の川越城下の様子を描いたとされる『秋元但馬守様川越城主之頃図』と松平大和守家時代（1767～1866）の城下図とされる『川越城下図』と比較すると、秋元家時代に城下の外であったところまで武家地が拡大し、これに伴い道もつくられたことがわかる。ここでの道のつくられ方は直線路よなっている。一方、秋元家時代に郷分町（村が町場化したところ）や燈明寺（東明寺）・泰安寺の寺域となっていたところまでも武家地が拡大し、同様に道がつくられたことがわかる。こちらでは、郷分町であったところや寺域境であったところに沿うように道がつくられている。この拡大範囲の道は非常に屈曲が多く、郷分町であった側は、通称「七曲がり」と呼ばれるようになった。なお、「七曲がり」とは道が幾度にも折れ曲がっている場所のことをいう。

ふたつの城下図から「七曲がり」は、江戸時代も後半になってつくられた屈曲路であることが明らかであるが、防衛上の目的からつくられたかどうかは定かではない。『秋元但馬守様川越城主之頃図』では既に屋敷割の原型がつくられており、松平大和守家時代にはその屋敷を踏襲するかたちで武家地は拡大された。そして、この屋敷割の沿うとともに各屋敷への出入りを容易にするために道がつくられ、結果的に複雑な屈曲路をかたちづくることになったのであろう。「七曲がり」は、武家地の拡大という事実が生んだ道であること。そして、今に江戸時代の名残を留める道であることには間違いない。

露地の突き当りを右折し、40m先、二つ目の左の露地を左折して入り、30m程先のクランク（鉤の手）を進む。50m程の丁字路を左に曲がったところに**「永島家住宅旧武家屋敷」**がある。

永島家住宅旧武家屋敷

永島家住宅は、川越藩御典医の屋敷跡で、川越城南大手門に近い位置にあります。この屋敷の小屋組は叉首（さす）構造で、棟の高さは三段となっており、痕跡などから、現在の住形態になるまで大きく2回の増改築があったことが推測されます。現在の玄関から床の間付の座敷に至る諸室と東側に張り出しす内向きの諸室に分かれ、公私空間を区分した武家住宅の特質を残す遺構と考えています。

現在埼玉県下三城城下町（川越、忍、岩槻）では武家屋敷の遺構はほとんど残っていません。また、関東圏内でも残存事例はわずかで、学術的にも貴重な遺構と言えます。

武家屋敷の俤（おもかげ）＝永島家住宅前の解説板

「坊主、枳殻（からたち）、医者、山伏」。これが古い川越の名物とされていた。

外（ほか）はともあれ、枳殻の木の多いのは、武家屋敷。屋敷の外囲いは、枳殻の生垣でなければならぬと、きめられたためである。

三久保町は昔、武士の屋敷町であり、三十軒程（北久保、竪久保、南久保、清水町を併せて）が枳殻の塀を連ねていたのであるが、今、その俤を遺すもの僅かにここだけとなり、この生垣の中に枳殻が僅かに残っている。

永島家住宅から福田屋書店から入った丁字路まで戻り、直進する。丁字路の直ぐ先左に「瘡守（かさもり）稲荷神社がある。天然痘、できもの、はれもの、かさぶた、梅毒などの病気平癒の神社。100m進むと右に

直角に曲がり、50m先で左に、20m先で右に曲がり50m先で道路に突き当たるので左折、40mで川越街道県道51号線に突き当たる。右折して140m程北上すると**「鉤の手」**がある。
ここから300m北の現在市役所がある川越城西大手門までを旧江戸町という。城より江戸に行くため起点となる町であるため、江戸街道と呼ばれていたが、町の繁栄と共に江戸町と言われるようになった。

鉤の手から300m、「市役所前交差点」の場所が**「川越城西大手門跡」**で交差点の東北の角（市役所の左前）に「川越城大手門跡」の石柱と太田道灌の像があり、ここが**川越街道の終点**である。

お疲れ様でした。これからは、川越市内の名所旧跡を訪ねる歴史と観光を楽しみましょう。

市役所前交差点（川越城西大手門跡）から西に向かい、かつて高札場であった「札ノ辻」で中央通りを横切り、県道39号線を150m進むと右側に「大蓮寺」の参道がある。入口から本堂までは100m強ある。

大蓮寺

大蓮寺は、宗派は浄土宗、来迎山紫雲院と号す。開山は感譽上人、開基は蓮馨尼（大道寺駿河守政繁の母）。開創は永禄十年（1567）8月12日。蓮馨尼は、感譽上人に深く帰依し、川越に上人を招き、蓮馨寺（れんけいじ）、見立寺（けんりゅうじ）を建立した。感譽上人は、「新編武蔵風土記稿」によると、北条氏康の子」とあり、永禄六年（1563）～九年（1566）増上寺の十世を勤め、辞して蓮馨寺に帰り、翌年蓮馨尼が没すると導師を勤めた。大蓮寺の開創が蓮馨尼の没年月日となっていることから蓮馨尼の菩提を弔うために開山されたものと思われる。

大蓮寺の隣にある**「高澤不動尊」**は占いで有名。

大蓮寺を出て右へ70m程の右の道を入った所の左側に**「六塚稲荷神社」**がある。

六塚稲荷神社

祭神は、豊受姫命（荼枳尼天像）。境内社に琴平神社・三峯神社・八幡神社がある。
六塚稲荷神社は、川越城主太田道真（太田道灌の父）が当地を開拓する際に切り崩した六つの塚に稲荷社を祀ったといい、六つの塚の稲荷社だから六塚稲荷と称したとも、六つの稲荷社を当社に合祀したから六塚稲荷と称したともいう。
境内入口脇にある「四ツ塚稲荷神社」は元、札の辻にあったが、大正初期の道路拡張のより当社へ合祀された。また、境内社の琴平神社・三峯神社・八幡神社は大蓮寺内にあったものが、神仏分離により当社に合祀されたものと思われる。

六塚稲荷神社の西隣り道路脇に**トイレ**がある。
トイレの左脇から新河岸川の縁に降りられるので、河沿いに北上、下ると濯紫公園があり、トイレもあるので、昼食をとれる場所。
六塚稲荷神社脇のトイレに戻り、右の信号で県道39号線を渡り、高沢橋を渡って直ぐの右の道を入り、新河岸川沿いに進むと、すぐ左に**「見立寺」**の入口・参道がある。

見立寺（けんりゅうじ）

見立寺は、「寿昌山（じゅしょうざん）了心院（りょうしんいん）」と号し、浄土宗の寺。永禄元年（1558）、後北条氏の重臣で川越城将大道寺駿河守政繁は、城下に一寺を建立し「建立寺」（後に見立寺と改名）と名付け、一族中の感譽存貞和尚を小田原伝肇寺から招請して開山した。感譽存貞和尚は、永禄六年（1563）増上寺十世となったが、永禄九年（1566）見立寺に再住した。そして先に政繁の母が平方村に造営した「蓮馨寺」を川越に移して両寺を兼帯した。
天正十八年（1590）豊臣秀吉の禁制書に「武州川越蓮馨寺同門前　見立寺」と記されているが、蓮馨寺門前から当地に移った年代・経緯などは不詳で、恐らく、延宝年中（1673～1681）と考えられている。
見立寺は文政11年（1823）3月25日の石原（中島注：新河岸川対岸の町）火事で類焼し、更に天保11年（1840）4月8日にも焼失し、再度の火事で、古文書等も焼失して現存していない。現本堂は、明治14年（1881）に建立されたものである。
その他、当寺には、板碑（青石塔婆）2基、徳本上人名号碑、松平（松井）周防守家の阿弥陀如来坐像並藩主位牌、古誌に記されている石灯籠、赤穂浪士八頭右衛門七の妹の墓（六地蔵の隣）などが現存している。
見立寺は小江戸川越七福神めぐりの第六番札所、「布袋尊」が本堂のてまえ右側に祀られている。

見立寺から県道39号線に戻り、札の辻の方へ70m程戻った右側に石畳の小道がある。この小道が**「菓子屋横丁」**である。菓子屋横丁は、環境省選定の「かおり風景100選」に選ばれ、石畳の道に20数店が軒を連ねています。手作りの飴や駄菓子、団子やサツマイモを使った菓子などを扱っていて、童心に返ることができる横丁です。
横丁を通り抜け、突き当りを右折し40m程の右側に**「養寿院」**がある。

養寿院

養寿院は、青龍山と号し、曹洞宗の寺。本尊は釈迦牟尼仏。寛元二年（1244）、河越遠江守経重公が開基となり、密教大闍利圓慶法印を開山として創建。天文四年（1535）、時の住職隆専上人、曹洞宗太源派下扇叟守慶和尚の宗風を慕い寺を付嘱。爾来、密院を禅門に改めた。
江戸時代には幕府より朱印十石を与えられた。歴代川越城主の信仰も篤くおおいに栄え、また、近年まで、曹洞宗専門僧堂（修行道場）として、多くの人材を打ち出してきた。
境内・本堂南側には、**「伝・悲運の武将河越太郎重頼の墓」**がある。
河越氏は、坂東平八氏の一つ秩父氏の出で、重頼の祖父重隆の時に川越に進出し、河越氏を名乗った。重頼の妻は比企禅尼（源頼朝の乳母）の娘で、その関係で、はやくから、伊豆の流人であった源頼朝を助け、平家追討、鎌倉幕府の樹立に力をつくした。
のち、頼朝・義経不和になるや、重頼は、その娘が義経の正妻たるの故をもって、誅殺され、所領は没収された。
現在、本堂南側に重頼の墓として伝えられる五輪塔があり、かたわらに明治の元勲右大臣三条実美公の篆額、文学博士重野安繹撰文の顕彰碑が立っている。
養寿院にある史跡・文化財
●文応の銅鐘（国指定重要文化財）
本堂には、河越氏が新日吉山王宮に奉納した銅鐘（国指定重要文化財）があり、銅鐘の「池の間」に刻まれた“河肥”の文字は、川越の歴史上とても価値の高いものです。

「武蔵国河肥庄新日吉山王宮奉鋳推鐘一口長三尺五寸大檀那平朝臣経重大勧進阿闍利圓慶文応元年大歳庚申十一月廿二日鋳物氏丹治久友大江真重」の銘文がある。

●円空仏一体（市指定文化財）

御丈一尺余りの菩薩像。円空と養寿院との関係は不明。

●岩田彦助儒葬墓（市指定文化財）

彦助は、江戸時代初期の儒学者。万治元年（1658）生まれ、享保十九年（1734）川越城表御殿で病死。谷村藩・川越藩主秋元喬知に重用され、喬知が老中に就任すると、江戸家老を務めた。

「秋元に過ぎたるものが二つあり、無の字の槍と岩田彦助」といわれたほどの人物。

養寿院には、その他に「川越城の七不思議、七、城中蹄（ひづめ）の音」の屏風画や岩手県雲際寺にある源義経と重頼の娘である郷御前の位牌の写しがある。

●川越城の七不思議、七、城中蹄（ひづめ）の音

江戸時代初期の川越川越城主酒井重忠候は、不思議なことに夜ごと矢叫（やたけ）びや蹄（ひづめ）の音にやすらかな眠りをさまされていた。

天下に豪勇をうたわれた重忠候だったが、あまりに毎夜続くので、ある日易者に占ってもらった。すると、城内にある戦争の図がわざわいして、候の安眠を妨げているという卦（け）がでた。

そこで、さっそく家臣に調べさせたところ、果して、堀川夜討の戦乱の場面をえがいた一双の屏風画がでてきた。

さすがの候も、この以外さに驚き、考えた末、日ごろ信仰し帰依している養寿院へ、半双を引き離して寄進してしまった。すると、その夜からさいもの矢叫びや蹄の音も聞こえず、候は安眠することができたという。

養寿院を出て東に直進。120m程で県道39号線中央通り「蔵造りの町並み」に出る。右横に**「蔵造り資料館」**が、左には**「川越まつり会館」**、その向かいに**「大沢家住宅」**がある。

市指定文化財**「蔵造り資料館」**

当館は、煙草商を営んでいた小山文造が明治26年（1893）に建設。現在は内部が見学でき、土蔵造りに関する資料や民具なども展示されている。入館料100円。

川越まつり

「川越まつり（川越氷川祭の山車行事）」は、10月14日に氷川神社が執行する「例大祭」を根源として、直後に行われる「神幸祭」と「山車行事（祭礼）」から成り立っている。

「神幸祭」は、慶安元年（1648）に、当時の川越藩主松平伊豆守信綱が氷川神社に神輿・獅子頭・太鼓等を寄進し、祭礼を奨励したことが始まり。慶安4年（1651）から華麗な行列が氏子域の町々を巡行し、町衆も随行するようになった。この祭祀、祭礼が「川越まつり」の起源である。

当初の「神幸祭」は、氷川神社の神輿行列が氏子の町々を渡御し、氏子域の十ヶ町が仮装行列などの練りものの附け祭りで供奉していた。

元禄11年（1698）、十ヶ町の一つ、高沢町が江戸の祭礼に習って、初めて踊り屋台を披露した。踊り屋台は当時の江戸祭礼の花形であった。川越は、新河岸川の舟運によってリアルタイムに入ってくる江戸の風流、風俗を取り入れながら、徐々に祭礼を発展させてきた。現代の祭礼儀式、しきたりも文化・文政時代の

申し合わせがルーツといわれている。
その後、江戸祭礼で山車が主役になったのを機に、天保15年（1844）には、十ヶ町の山車が氷川祭礼絵額（絵馬）にも残されるように、すべて一本柱型式に統一され、勾欄の上に人形を乗せるようになった。
平成17年（2005）2月、江戸の天下祭（神田明神、赤坂日枝神社の各祭礼の総称）の様式や風流を伝える貴重な都市型祭礼として、「川越氷川祭の山車行事」が国指定重要無形民俗文化財となった。
曳き回す山車は、29台。祭礼は、毎年10月の第3土曜・日曜に行われる。今年は、10月19日（土）、20日（日）に開催される。

大沢家住宅（重要文化財）

寛政四年（1792）に豪商・西村半右衛門（近江屋）が呉服太物（注：呉服は織物、太物＝ふともの＝は綿や麻の織物をいう）を商うための店舗として建てた商家。明治26年（1893）の川越大火の焼失を免れた川越最古の蔵造りである。
当蔵造りが、川越大火で例外的に免れたので、そこから川越商人が蔵造りの町屋を次々に建築する契機となった。

大沢家住宅の右脇の道に入り、60m程の右側に「本宗（ほんそう）稲荷神社」と「稲荷の井戸」がある。突き当りを右折し100m程進むと「鐘つき通り」に突き当たるので右折、70m程の右側に**「時の鐘」**があり、潜った奥に**「薬師神社」**がある。

時の鐘

時の鐘は、江戸時代初期、酒井忠勝が川越藩主（1627～1634）のころに建設されたと伝えられています。その後何度か焼失し、現在の時の鐘は、明治26年の川越大火の翌年に再建されたもので、高さは約16メートルあります。平成8年には、環境庁の「残したい日本の音風景百選」に選ばれています。

薬師神社

薬師神社は、以前瑞光山医王院常蓮寺という寺でしたが、明治維新の折に薬師神社となりました。御本尊は薬師如来の立像で行基菩薩の作といわれています。五穀豊穣、家運隆盛、病気平癒、特に眼病にご利益があるといわれています。右奥の稲荷神社は、出世、開運、合格に著しいご利益があるといわれています。

札ノ辻から仲町交差点までを**「蔵造りの街並み」**で、明治26年（1893）3月17日に養寿院門前から出火した川越大火で市街地の多く（川越の町の2/3）を焼失、その後、川越商人は豪壮な耐火建築である蔵造りの商家を競って建てた。すでに東京では石壁やレンガでの建築があったにもかかわらず、土蔵で建築した。

時の鐘交差点を左に行き、右の一本目の道を入り、長い参道の奥、突き当りに**「長喜院」**があり、その右側に小さな**「雪塚稲荷」**がある。

長喜院

長喜院は、冷月山と号し、曹洞宗の寺。創建は天文十九年（1550）、開基は、大道寺権内長喜。開山は広

済寺三世　大翁文廣大和尚。本尊は、釈迦牟尼仏。境内には、苦行釈迦像がある。パキスタンのラホール美術館蔵「苦行の釈迦像」の原寸大のレプリカ。また、長喜院には、本尊とは別に「大栴乾闥大鬼神王（だいせんけんだつばだいきじんのう）」という胎児・小児の守護をする仏がいます。

雪塚稲荷神社

文政六年（1823）に町民が一匹の白狐を打ち殺した事件に端を発し、その祟りを鎮めるために建てられた社である。大雪の日に因んで雪塚稲荷神社と称したという。
当社は、城下町川越の十ヶ町の一つ、南町（現在の川越一番街）の氏神として崇敬されてきた。（注：十ヶ町は、札ノ辻を中心とした一帯が城下の商人地区である上五ヶ町＝江戸町、本町、南町、喜多町、高澤町。隣接して職人町の下五ヶ町＝鍛冶町、多賀町、鴫町、志多町、上松江町である）
南町は、江戸時代から明治にかけて60軒あまりの町であったが、江戸に店を構える大商人を多く生み出し、明治十一年（1878）には県下初の国立銀行を開業させるなど、十ヶ町の中で中心的商業地であった。
　当社の創始は、『江戸の昔、ある大雪の夜、南町の通りに一匹の白狐が迷いあらわれた。これを見た若い衆数人が白狐を追い回してついに打ち殺し、挙句の果てにその肉を食したところたちまち熱病にかかり、さらに毎夜大きな火の玉が街に現れるようになった。
町内の者はこれを白狐の祟りだとして恐れおののき、近くの長喜院の境内に社をたて、白狐の皮と骨を埋めて塚を築き、雪の日の出来事であったことにちなんで、雪塚稲荷神社と名付けて奉斎した』という。
　明治二十六年（1893）の川越大火によって、本殿・拝殿焼失、同三十年（1897）四月二十八日に再営した。その際、土中の御神体を改めたところ、白狐の毛が逆立つのを認め驚いて再び埋納したという。
　また、昭和五十五年、社殿の修理中、床下中央部から石板が発見され、『雪塚稲荷神社遺躰文政六年二月十二日御霊昇天　同年三月十二日御霊祭日と定め同年同日雪塚稲荷神社と称す』との銘文があった。
　このことにより、伝説が事実であったことが判った。

　雪塚稲荷神社から一旦一番街に出て右折、次の右への道を入る。突き当りは「行傳寺」で左折。次の右への道を入り突き当りを右。直ぐに左折すると正面に「栄林寺」がある。

榮林寺

榮林寺は、雲興山と号し、曹洞宗の寺。川越藩初代藩主酒井備後守忠利が、伯母の玉室榮琳大姉の為に建立した寺。
榮林寺の山門は、川越城の二の丸（現在の川越市立博物館の東隣の川越武道館辺り）にあった「蓮池門」を、明治2年の版籍奉還後に移築したものと言われている。「蓮池門」は、本丸から見て北東の鬼門に位置し、死者を送り出す際は蓮池門から送り出したそうである。川越城の遺構は数が少ないのでとても貴重な存在である。

　榮林寺から中央通り（一番街）に戻り、仲町交差点を南下、180m程の信号の右に**「蓮馨寺」**があり、門の左に「檀林　蓮馨寺」、右に「子育　呑龍上人」と刻まれた石柱が聳えている。

蓮馨寺

蓮馨寺は、孤峰山宝池院と号し、浄土宗の寺。本尊は阿弥陀如来。河越夜戦後の天文18年（1549）、武蔵国後北条氏河越城主大道寺政繁の母、・蓮馨によって開基、開山は大道寺政繁の甥にあたる感譽存貞

上人。感譽存貞上人は増上寺第十世法主となった。当山で修業した源譽存応上人は、後に大本山増上寺の第十二世となり、徳川家康を増上寺の檀越(だんおつ=檀那)としました。源譽存応上人(後の観智国師)は徳川家康の宗教上の最高顧問)。
江戸時代の慶長七年(1602)には浄土宗の関東十八檀林の一つとなり、慶長八年(1603)の開幕後、葵の紋所が許され幕府公認の僧侶養成機関となった。
正面の「呑龍堂」には、呑龍上人(1566〜1623)が祀られている。呑龍上人は源譽存応上人の直弟子で、各地を巡って旱魃で作物が取れず窮乏する地域にはその威神力によって雨を降らせ、飢饉で農家が困るとしの子供たちをあずかり育て、あらゆる困り事をたちまちのうちに解決し、多くの人々を幸せにした生きた仏様です。
祈願所(呑龍堂)の正面には「おびんずる様」が鎮座しています。参拝者がその体を触ると病気が治り、頭を触ると頭が良くなると言われ、大人気の仏様です。もともとはお釈迦様の弟子で、寺にとどまらず、インド各地を巡り、人々を救うよう命じられたと言われています。このため、多くの「おびんずる様」は寺の外に祀られています。
境内には、「林崎甚助重信ノ鎮魂之碑」がある。林崎甚助は出羽国出身の戦国時代から江戸時代前期にかけての武芸者で、居合抜刀の始祖と言われています。生涯武芸の道を極め、旅先の川越の地で終焉を迎え、当山で葬儀が執り行われました。毎年2回、全国から名将が集い、奉納演武会が開催されます。

蓮馨寺から中央通りを横切り70m程の十字路(左の道は「大正浪漫夢通り」で映画の撮影にも使われた大正ロマンあふれる商店街)を右に入り、石畳の道を70m程進んだ右側に**「川越熊野神社」**の参道がある。
鳥居をくぐると、参道の両側に**「足踏み健康ロード」**がある。二の鳥居をくぐると、右側手前から「加祐稲荷神社」、「輪投げ舎」、「宝池」、「厳島神社」、「秋葉神社」、「大鷲神社」と並び、正面に拝殿と本殿がある。
境外社として、「本阿弥稲荷神社」と「火除稲荷神社」がある。

川越熊野神社

御祭神は、熊野大神で、伊弉諾尊(いざなぎのみこと)、事解之男尊(ことさかのおのみこと)、速玉之男尊(はやたまのおのみこと)の御三神です。開運・縁結びの神。
由緒は、当社は天正十八年(1590)、蓮馨寺二世然譽文応僧正が、紀州熊野より勧請したことに始まり、正徳三年(1713)社殿を改築し、鳥居を石造りにしました。現在ある二の鳥居がそれです。
「新編武蔵風土記稿」(国立公文書館蔵)の蓮馨寺図には、辨天社や秋葉社、稲荷社など現在熊野神社にあるすべての末社が描かれている。

加祐稲荷神社

祭神は、倉稲魂命(うかのみたまのみこと)。産業全般を司る神。由緒は不明だが、蓮馨寺開祖以前からあり、様々の厄災を免れたことが多くあった。その事から、神の祐(たすけ)を加えて下さることから、加祐という社号を付けたという。明治2年に蓮馨寺境内より遷座して熊野神社の末社となった。

川越銭洗弁天厳島神社と宝池

祭神は、市杵島姫命(いちきしまひめのみこと)。音楽・福智・延寿・除災・得勝を司る神。由緒は不明だが、「新編武蔵風土記稿」の蓮馨寺図の中にある「弁財社」が現在の「厳島神社」である。蓮馨寺の境内に「宝池」と称する池があり、開祖が以前より宝池に鎮座していた「辨天社」を崇敬し、池名「宝池」を取って「孤峰**山宝池院**」の院号としたという。

明治2年、蓮馨寺境内より遷座して、熊野神社の末社となった。平成19年、その「宝池」と水源を同じにする井戸水を、現在のこの地まで引き、「平成の宝池」とした。

秋葉神社

祭神は、火之迦具土命(ひのかぐつちのみこと)。火除け・火伏の神。由緒は、「新編武蔵風土記稿」によれば、第十代川越城主秋喬知により、享保八年(1723)に造立。秋元氏が蓮馨寺住僧東譽圓悦なる者に議り、当秋葉社安置の地を熊野神社境内にトし、丘を築き、勧請させた。昭和33年まで、その小丘が残っていた。

大鷲神社

祭神は、天之鳥船命(あまのとりふねのみこと)。家内安全・商売繁盛・開運の守護神。由緒は、大正11年、南埼玉郡の鷲ノ宮神社の分霊を奉斎したと伝えられている。初め熊野神社に合祀されたが、後に社殿を建立、遷座祭を執行して末社とした。

熊野神社に隣接して、左手に「川越まつり」で曳きだされる「道灌の山車」の蔵がある。
熊野神社の足踏み健康ロードの参道を出て、石畳の道を右折、3・40mの信号交差点を渡り左折、直ぐに右折し、また直ぐに右折。突き当りの右側に「火除稲荷」がある。

火除稲荷

火除稲荷は、熊野神社の境外社で、明治初期にはすでにあったようで、明治23年の川越大火の時、ここで火が止まったことで知られている。

火除稲荷の角を左に、直ぐ右折して80m程の丁字路を左折。40m強の左に「出世稲荷神社」があり、参道入口に鳥居とその脇に二本のイチョウの大木が聳えている。また、右隣は「龍神の山車」の庫がある公園。

出世稲荷神社

祭神は、宇迦之御魂大神、佐田彦之大神、大宮能売之大神。当稲荷神社は、天保2年(1832)に地主・立川氏が屋敷鎮守として伏見稲荷大社を勧請して創建したという。立身出世を願う者に霊験がある。

出世稲荷神社を出て、斜め前の道に入り南行、2本目の向かいに新富町郵便局がある交差点を右折。150m程で中央通りに出るので左折すると、西武新宿線本川越駅がある。

今日はここまで。
本川越駅から東村山経由で国分寺に出る。